不定期刊行　　第451号　2012.05.19

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

僕らの大好きな山が「危険だ」という風評が広がるのは悲しい

自然を相手にしている以上、絶対は有り得ないし、リスクを完全に排除することなどできるはずもない。「人間は一本の葦である」と言ったのはパスカルであったが、自然の中で極めて弱い葦は、どんなに道具が進歩しようと、どんなに技術が卓越していようと、本質的には葦のままなのだ。その意味で、登山にベテランは有り得ないし、僕自身山のベテランでもなんでもない。常に謙虚に山に向き合うことによってのみ、弱い葦も吹き抜ける風を避け、雨をやり過ごし生き延びることができるのだ。

前号で例の白馬遭難について書いた。たまたま同時期に同じ山域に入っていたことから、その後マスコミ数社からも取材を受けた。僕は、僕らの一番好きな山のことが、「また人に迷惑をかけるような遭難があった。何故そんな思いまでしてそんな危険なところに踏み込むのか？」とか「ベテランの登山家でさえ遭難をした。だから危険だ。」いう紋切り型の結ばれ方をすることに強い憤りを覚える。同じ時期に同じ山域に踏み込んでも、絶対多数の人間は無事に生還しているのである。その差はどこにあったのだろうか。

今回亡くなられたメンバーの中にも「海外登山の経験がある」方や「何十年も山に登っている『ベテラン』」と言われるような方がいたそうである。だから、当然のように「ベテラン登山家でさえ対応できなかった悪天候」というような報道もあった。先にも書いたが僕は、山は何十年も登っているから、また何十回も登ったから「ベテラン登山者」になるとは思っていない。人に連れられて登る登山を何回繰り返しても、また自分で計画をしないで何十年山に登っても、知恵のある登山者とは言えないと思う。地図や天気図を読んでの判断ができなければ、ピンチの際に対応はできない。また、「海外登山」もたとえばネパールの解禁ピークへのトレッキングやヨーロッパアルプスのトレッキングなどは、「海外登山」の範疇ではないと思っている。もちろん高所順応ということはあるが、しかし、そんな山でもネパールの5000mの山へ行ったというだけで、登山に興味のない人が聞けば、「すごい」登山をした人ということになる。お金さえ払えば、重い荷物も持たず、すべてはポーター任せ、途中途中では食事から寝る場所の設定まで至れり尽くせりのトレッキングをしたことを、海外登山と言うことができるだろうか。

どんな登山をしてきたのかという質を問うことなしに、回数や年数、場所だけで『ベテラン』という評価をすべきではないと思う。そうでないと今年のように天候が荒れ遭難者が多発した後は「山は危ないところだ。ベテランでも事故を起こすから・・・。」と、僕らの大好きな山の一番素晴らしい時期である残雪期がまるで悪者であり、そこに行く我々は馬鹿者であるかのように風評が広がって行く。何と悲しいことか。

その点では、自分も含めて謙虚であることが必要だと思うのだが、今回遭難を起こした方々が知識や技術がなかったとは言えないし、体力にしても同世代の普通の方に比べればきっと優れていただろうと推察する。ならば、なぜ遭難は防げなかったのか。それは危険を回避する知恵、困難を乗りこえる知恵がなかったのだろうと思う。

僕らが船越の頭で見たのはその後の毎日新聞の記事なども読めば、間違いなく例の6

人組に違いない。彼らは12時になっても船越の頭に到着していなかった。つまり6時間以上歩き続けてなお、予定の行程の１／３も進んでおらず、行く手には行程の最大の難所となる白馬岳をはるか先に控えて、天候の急変という事態に遭遇したのである。しかし彼らはなおも前進した。なぜ、彼らは引き返すことをしなかったのか。よしんば、パーティの中の誰かにトラブルが生じて行くも戻るも不可能であったとしても、なぜ寒風吹きすさぶ尾根にとどまったのか。稜線から南斜面に僅かでも下る知恵があれば、そして彼らの誰もが持っていなかったスコップがあれば、最悪の事態は防げたのではないか。少し山を歩く知恵を持った登山者であれば分かるはずである。

死者に鞭打つ気はさらさらないのだが、僕は本当に自立した登山者、単純にいうと「地図が読め、天気を読め、その場に応じた対応ができる」知恵をもった登山者とそうでない登山者の差は明らかに存在していると思っている。マスコミの取材を受けたとき、僭越ながら僕は何社かにそんな意味のことを言った。

いずれにしろ、自分も謙虚に、そして時には臆病になってこれからも慎重に山に登りたいと思っている。池工山岳部は一年生が連休明けも２名入部し、部員が１８名になった。その彼らに「この連休中に起こった事故で家の人は君たちが山岳部に入ったことを心配してはいないだろうか？」と尋ねてみた。もちろん心配しないわけがない。しかし、信濃毎日新聞の記事を読み、そこに載せられた僕のコメントを読んで安心して下さったという保護者の多いこともわかり、ちょっと安心した。僕の「自立した登山者を育てたい」という説明も理解して頂いたようだ。しかし、それだけにちょっとのミスも許されない。責任は重大である。これからも注意しながら、知恵を持った自立した登山者を育てたい。自分自身も育ちたいと思っている。そんな色々な思い、とりわけ自戒の思いを込めながら、今回の遭難で亡くなられた方々のご冥福をお祈りします。

県大会で会いましょう

17日、18日の両日、県高体連の専門委員で今年度の県大会の下見を行なった。すでに告知されている通り、今年の会場は「富士見高原スキー場～編笠岳～西岳～立場川キャンプ場」という縦走である。4月の低温の影響か、編笠岳の登り2300mより上の樹林帯には氷化した残雪が、編笠岳から青年小屋への下りの樹林帯や青年小屋から西岳までの樹林帯にも残雪が残っていた。前者はかなり滑りやすく、後者は踏み抜きなどの恐れがあり、歩き慣れていない生徒には時間がかかるとともに注意が必要であると思われた。大会まではあと2週間あるので、この先の気候によってだいぶ融雪が進むだろうとは思うが、下見に入るチームは、近日中に大会本部から出される部報2号を参考に気をつけていただきたい。また、西岳の下りの「信玄隠れ岩」より下部については一部登山ルートがわかりにくい箇所もある。赤テープを巻いてはあるが、こちらも注意されたい。

今年の県大会への参加者は、男子が14チーム、女子が4チーム。男子はBからDチームも6校10チーム、オブも男女合せて41名と参加総数153名で昨年を大幅に上回った。全県的に山岳部員が少しずつ増えていることを知り、嬉しくなった。Cチームまで出せる（言い換えれば少なくとも12名以上部員がいる）学校が2校、Dチームまで出せる学校（実は池工ですが）が1校など10名以上の生徒を抱えている学校が、6校あった。年に一度県内の高校山岳部員が一堂に会する最大のイベントである。5月31日に若者の声が八ヶ岳山麓にこだまするのが今から楽しみである。